〈近代本論第十回：キーワードと年表〉

１．年表

１６３７　ルネ・デカルト『方法叙説』
１６３７～３８　島原の乱
１６３９　鎖国開始
１６５１　トマス・ホッブズ『リヴァイアサン』
１６６６　荻生徂徠生まれる（～１７２８）
１６８５　石田梅岩誕生（～１７４４）
１６９５　西川如見『華夷通商考』
１７０１　赤穂事件
１７１６　徳川吉宗（１６８４～１７５１：将軍在位１７１６～１７４５）第八代将軍位に
１７１６～１７３５頃　享保の改革
１７２０　蘭書翻訳の解禁
１７２７頃　荻生徂徠『政談』成立
１７３０　本居宣長誕生（～１８０１）
１７３３　杉田玄白誕生（～１８１７）小浜藩（若狭国）下屋敷で藩医の子として生まれる
１７３９　石田梅岩『都鄙問答』
１７７１　杉田玄白ら、腑分けを実見　→　江戸蘭学の本格化
１７７４　『解体新書』（『ターヘル・アナトミア』和訳）
１７８１　カント『純粋理性批判』
１７８９　フランス革命
１７９５～１８２１　宣長の代表的な随想、『玉勝間』の分冊刊行
１８３５　福沢諭吉誕生、中津藩士福沢百助次男。百助は大坂で藩債の処理にあたっていた
１８５３　ペリーの黒船来航
１８５４　諭吉の長崎遊学、砲術を中心とした蘭学修業
１８５５　諭吉、大坂の適塾（緒方洪庵塾）入塾、蘭学修業の本格化始まる
１８５８　日米修好通商条約
１８５９　諭吉の横浜体験　→　蘭学から洋学（英語）へ転向
１８５９～６０　諭吉、蛮書調所に入所、後に翻訳方となる

１８６０　諭吉、咸臨丸使節団に参加
１８６０　桜田門外の変

２．蘭学評価の基本的問題
→　移植された近代合理主義は模倣にとどまるのか？
→　丸山、服部はその見方に傾く
→　「固有の」近代の萌芽としての徂徠、宣長を高く評価
→　心学も蘭学も彼らの視界では、近世を代表する定位型ではなかった
→　その評価の根本には、彼ら自身の近代観の偏頗がある（前節）
→　蘭学の主体化　→　前近代における合理主義の自己展開
→　維新志士の行動的合理主義へ
→　日本における近代的定位を主体的に準備
⇔　徂徠古学、宣長古学には近代性は皆無
→　ただし神儒の混淆は〈錦旗〉のアウラを合成
→　合理的行動主義者西郷と〈錦旗〉の組み合わせ
→　維新の達成　＝　近代化と復古の合体　→　自己矛盾の原型

３．江戸蘭学の画期は『解体新書』（１７７４年）
→　しかし蘭学そのものはもっと早く始まっていた
→　西川如見『華夷通商考』（１６９５年）
→　天文地理の分野から
→　ルネサンス期の〈人間と世界の発見〉に照応（しかし世界→人間の順）

４．腑分けそのものも、蘭学ではなく、漢方医の実験精神から始まった
→　山脇東洋（１７０６～１７６２）の〈新試実験〉（１７５４年）
→　刑死者の腑分けを図解で紹介
→　解剖をほとんど行わずにきた漢方としては革新的
→　しかし合理的、全体的な身体把握はいまだ欠如していた

５．将軍吉宗の好奇心が蘭学の世界を広げた
→　キリスト教関係以外の蘭書翻訳を許可奨励（１７２０年）
→　実学的洋学の奨励（青木昆陽→前野良沢）
→　吉宗自身の旺盛な好奇心がその大元にあった
→　蘭学の隆盛も世界と人間に対する素朴な好奇心が大きな動因となる

６．『蘭学事始』における近代科学精神の覚醒（１７７１年）
→　刑吏の経験　→　解剖図と一致　⇔　漢方の〈五臓六腑〉説
→　眼前の事実による旧パラダイムの否定（引用１）
→　腑分けを実見した漢方医の混乱

→　人体の〈華夷〉の差を妄想

≒ ティコ・ブラーエの〈周転円〉　→　旧パラダイムへの固執

→　装飾的修正を重ねる　→　迷路化

→　杉田たちは〈人体の一元性〉を堅持（　→　〈人間の普遍性〉の土台）

引用１

〈良沢と相俱(あひとも)に携行(たづさへゆき)し和蘭図(おらんだず)に照し合(あわせ)見しに、一として、其図にいささか違ふことなき品々なり。古来医経（※漢籍の医書）に説きたる所の、肺の六葉、両耳(りょうじ)、肝の左三葉、右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置、形状も大(おおい)に古説と異なり。〉（杉田玄白『蘭学事始』４９１ｐ）

７．蘭学の〈経世献策〉的展開

→　杉田玄白の海防献策　→　高野長英、渡辺崋山へ

→　〈蛮社の獄〉による弾圧（１８３９年）　→　実学（砲学）に限定される

→　合理主義そのものに内在する契機の自己展開

→　近代的定位は個我のアトム化と新しいシステムの模索が対になって始まった

→　ルネサンス人の登場と小邦国家の人為性、人工性は同時に起きている

→　デカルト的合理主義はすぐに〈自動機械としての国家〉のアイデアを生んだ（ホッブズ）

→　これも合理主義から内発的に発現した〈経世献策〉のヨーロッパ版と見ることができる

→　個と集団の弁証法はより普遍的な人間種の定位特性に規定されている

→　したがって個我のアトム化と〈作品としての国家〉の同時期の登場は、第二革命（の初期）に規定された、普遍的弁証法（個と集団の弁証法）のマクロ時代的な発現であると見るべきである

→　蘭学的経世感覚の自己展開は、近代的合理主義に内在する本質的契機の展開であり、ヨーロッパの直接的影響を超えた、近代的定位の根源の自己展開である

８．杉田玄白における近代的合理精神の自己展開

→　事実主義の蘭学　→　習得が容易

⇔　文飾の漢学　→　事実性が希薄で習得が困難（引用２）

→　法則の普遍性の直感（　→　デカルト的〈方法〉への視界）

⇔　法則なき漢学（経験の乱雑な集積に終始）（引用３）

→　人体の全体的把握

⇔　偏頗な部分的知識に終始する漢方

→　視覚の構造　→　機械論的モデル　→　理解の具体性、容易さ

⇔　漢方の視覚定義は高遠にして曖昧模糊（引用４）

→　受容の〈速度〉の問題

→　玄白における蘭学は、科学精神と合理主義の各契機を横並びに摂取する
→　内在的契機の自己展開
→　漢方批判　→　漢学批判　→　儒教的パラダイムの批判へ
→　華夷論に対する批判
→　中華もマクロ地域にすぎないという世界認識（世界の再発見）
→　〈礼楽文物〉（＝制度と文化）の普遍性、偏在性（引用５）
→　〈聖人の道〉の相対化
→　〈万国〉の多型性、多様性（近代的世界像の確立）（引用６）
→　〈国家〉の近代的概念　→　近代国家の理念の準備
→　〈医〉も〈国家の用〉と連結される（引用７）
→　儒臣の名言の換骨奪胎（范文正は王朝の名吏名臣の域を出ない）

引用２

〈漢学は章（※文飾）を飾れる文故、其（その）開け（※理解）遅く、蘭学は、実事を辞書（※辞典ではなく、言葉と書物の意）に其まま記せし故、取り受けはやく（※すぐに納得でき）、開け早かりし歟（か）、〉（同上、５０５ｐ）

引用３

〈支那の書は方ありて（※方策はあるが）、法なきなり。法なきにあらざるも、法となす所以のもの明らかならず。その法たるや、人々の好むところに阿（おもね）り、説を設け論をなし、立てて以て法となすなり。故に十書十説、いまだ一定せず。譬へば銅器を隔てて熱を察するが如し。或いは炭火と云ひ、或いは柴火と云ひ、或いは、熱湯と云ひ、或いは熱飯と云ひ、湯と火とを弁ぜず。ただその熱きを知りてこれを論ずるのみ。〉（杉田玄白、『狂医之書』、２３４ｐ）

引用４

〈譬へば、漢人の説、「天に日月あり。人に両目あり」と、理は高遠に聞へ候得共（そふらへども）、物を見る理は窮（きはめては）申さず候。和蘭人の所説にては、眼といふもの初メ水あり、其次に玉あり、又其次に鶏卵の白味の様なる水（※硝子体）あり、其水に万物の影うつる。初メの水より三段にうつり候事、千里鏡（トウメガネ）（※望遠鏡）と同じ理と見へ申候。〉（杉田玄白『和蘭医事問答』、２０５ｐ）

引用５

〈腐儒雇医は天地の大なるを知らず、少しく東洋二三国の事を聞き、支那を以て万国の冠となし、また少しくその書を読めば漫然とみづから称して曰く、夷狄はその俗もとより

礼楽なきなりと。それ礼楽文物は、以て尊卑を分かたんとなすなり。何の国か尊卑なからん。……〉（同上、２２８ｐ）

引用６

〈道なるものは、支那の聖人の立つるところにあらず。天地の道なり。日月の照らすところ、霜露の下るところは、国あり人あり道あり。道とは何ぞや。悪を去り善を進むるなり。悪を去り善を進むれば、人倫の道明らかなり。他は皆風俗なり。風俗は国によりおのおの異なるなり。いまだ四目両口の人を生ずるの国を聞かず。ただ風俗の異なるを聞くのみ。……それ地なるものは一大球なり、万国これに配居す。居るところは皆中なり。何れの国か中土となさん。支那もまた東海一隅の小国なり。〉（同上、２２９ｐｆ）

引用７

〈良相（しょう）たらずんば、良医たれ（※宋朝の名臣、范文正（はんぶんせい）の言葉）と言（いひ）たる人もありて、四民を救ふの一つなれば、さして国家の用なきものにもあらざるべし。〉（杉田玄白『形影夜話』、２５０ｐ）

９．杉田玄白の海防論　→　蘭学的経世献策
　→　ロシア船の来航に触発された（レザノフ来航は１８０４年）
　→　通商開港開国後の富国強兵の必要まで見据えた献策（引用９）
　→　幕末維新の状況を先取り

引用８

〈夫迄（それ）には（※開国後外国との戦争までには）十年も十四五年も間あるべし。但此節（ただしこのせつ）事故なきに気撓（たわ）まず（※たいしたことが起きないからといって気をゆるめず）、何卒（なにとぞ）此間に士民を養ひ、軍兵を訓練し、是迄の風俗も御改候様（おんあらためそうらふやう）御世話之有、万端整度（とゝのへたき）もの也。〉（『野叟独語』、３０２ｐ）

１０．近代的合理主義の自己塑性
　→　１．アトム的個我の覚醒　→　２．デカルト的合理主義　→　３．合理主義の国家論への応用　→　４．合理主義の自律としての立法精神
　→　先行するモメントは内在的な契機となって統合される
　→　〈水中花〉のモデル（プルーストの〈記憶の自己塑性〉のモデルの援用）
　→　蘭学が出会った解剖学は、２→３の段階の機械論
　→　そこから個我の覚醒へと自律的に遡行する（世界の発見＝〈万国〉の発見）
　→　そこから国家論へと自律的に展開する
　　＝　玄白の海防論、富国強兵論

⇔　モザイク化した西洋近代の受容は、多くの場合本質的ではなく、むしろ装飾的（司馬江漢たちの油絵画法模倣、平賀源内における受容模倣の多彩さ等）
→　対して杉田玄白、福沢諭吉、勝海舟等の蘭学受容は本質的、全体的
→　定位シンタクスそのものの自己塑性に共振し、同化する実存
　＝　近代的定位そのものの覚醒　→　日本の近代化の大きな定位資源となる
⇔　古学的復古（徂徠、宣長）においては、通時性は規範的に固定され、つねに上古、〈三代〉が規範の源となる（〈聖人の治〉および〈王土〉の）
→　共時的に押し寄せる、世界状況の（近代的状況の）感性が基本的に欠如
→　抽象的な攘夷論しか提供できなかった
→　この状況の共時性への素早い的確な対応が、蘭学精神を会得した幕末人の特性

１１．幕末蘭学の自己塑性　→　近代的合理精神の自己回復
→　二度の大弾圧により、蘭学の経世策はすべて抑圧された
　（〈蛮社の獄〉１８３９年、〈安政の大獄〉１８５８～５９年）
→　蘭学は軍事実学（砲術、軍制、築城術等）に限定された
→　しかし列強の圧力により、この実学は幕府のみならず諸藩に広がった
→　その実学を学んだ蘭学者の中から、真の合理精神が育っていく
　＝　勝海舟、福沢諭吉の例
→　それは軍事実学、医学に懐胎していた近代合理精神の自己塑性であった
→　近代合理精神とは近代的定位の根源であり、普遍である（本論考の立場）
→　維新革命はその意味で、近代精神の顕現の場でもあった
→　それは〈錦旗〉と〈攘夷〉との本質的な弁証法に入った
→　この開明性と復古性が日本近代を本質的に規定していく

１２．蘭学弾圧の幕藩体制における必然性
→　農本を本義とする幕藩体制は、貨幣経済の進展に当初から敵対的だった
→　江戸期を通じて制度経済の基本は年貢と〈石高〉であり、それは現物納付を定型とする（貨幣納付になったのは明治の地租改正からだった――序論第五節参照）
→　米は大坂の蔵元で換金され、それが幕府と諸藩の消費生活を支えた
　（体制の貨幣経済は消費しか知らない　→　倹約がすべての浪費問題を解決するような現実離れした妄想を持ち続けた）
→　流通、特に国際貿易は貨幣経済を著しく促進する
→　これを体制に組み込む手段は重商、原資の蓄積、合理的官僚制と軍制による絶対主義国家の創設のみだった
→　幕藩体制はこれを忌避し、鎖国を決行した
→　蘭学が開国、重商、流通と貨幣経済への入口となり始めるや、幕府は弾圧をもって臨んだ（制度イデオロギーからの必然）

１３．〈蛮社の獄〉（１８３９年）の背景

→　１８０８　フェートン号事件　（ナポレオン戦争の余波）

→　１８２５　異国船打払令

→　１８３７　モリソン号事件：アメリカの商船が難破した捕鯨船員を送り届けようとしたのを、軍艦と誤認して砲撃。

→　〈尚歯会〉のメンバー、高野長英（１８０４～１８５０）、渡辺崋山（１７９３～１８４１）の批判的献策

→　崋山は小藩（田原藩）の家老であり、藩政の合理的改革に成功していた

⇔　天保の改革に失敗した幕政閣老のアンビバレンツが伏線に

→　弾圧を行った江戸南町奉行鳥居耀蔵（１７９６～１８７３）は水野忠邦の右腕であり、儒学的素養から蘭学を敵視していた事実がある

→　〈蛮社〉という命名は国学の蘭学敵視からのものであり、ここには蘭学⇔儒学、国学の連携という対立が顕在化している

→　弾圧の結果、蘭学は軍事実学に限定された

１４．福沢諭吉の蘭学修業

→　下士の次男坊として、キャリアを造る必要

→　兄が砲術を勧め、長崎での修業に旅立った
（「人の読むものなら、横文字でもなんでも読みましょう」　→　〈人〉の普遍性の直感）

→　諭吉の父百助は藩債処理に携わった下級武士であり、漢学に造詣が深かった。諭吉も少年期は漢学塾で儒学古典の基礎を学んでいる

→　これが後年の〈通俗文〉に生かされることになった

→　兄の死で家督相続をし、一文無しになった諭吉は、〈砲術修業〉を続けるため（！）大坂の適塾に戻る（引用９）

引用９

〈大抵当時の世の中の塩梅式が分るであろう。というのは、これは必ずしも中津一藩に限らず、日本国中悉く漢学の世の中で、西洋流などということは仮初にも通用しない。俗に言う鼻摘みの世の中に、ただペルリ渡来の一条が人心を動かして、砲術だけは西洋流儀にしなければならぬと、いわば一線の血路が開けて、ソコで砲術修行の願書で穏やかに事が済んだのです。〉（『福翁自伝』〈大坂修行〉、５４ｐ）

１５．適塾（洪庵塾）の蘭学　→　近代的合理主義の自己塑性の実例

→　原書の少なさ、偶然の集成（十冊の原書と辞書！）

→　辞書は〈ズーフ・ハルマ〉（１８１６～３６編纂）

→　塾生による自習システム

→　実験精神の旺盛さ（引用１０）

→　塩酸アンモニアの自家製造に苦心
→　純粋な好奇心からの試行錯誤（引用１１）
（大坂の蘭学　⇔　出世の手段としての江戸蘭学）
→　自己目的的な蘭学（引用１２）
→　近代的合理精神の自己展開

引用１０

〈それからまた一方では、今日のようにすべて工芸技術の種子（たね）というものがなかった。蒸気機関などは、日本国中で見ようといってもありはせぬ。化学（ケミスト）の道具にせよ、どこにも揃ったものはありそうにもない。揃うた物どころではない、不完全な物もありはせぬ。けれどもそういう中に居ながら、器械のことにせよ化学のことにせよ大体の道理は知っているから、如何（どう）かして実地を試みたいものだというので、原書を見てその図を写して似寄（によ）りの物を拵えるということについては、なかなか骨を折りました。〉（同上、〈緒方の塾風〉、８６ｆ）

引用１１

〈すなわち衣食に縁がない。縁がないから縁を求めるということも思い寄らぬので、しからば何のために苦学するかといえば一寸説明はない。前途自分の身体（からだ）は如何（どう）なるであろうかと考えたこともなければ、名を求める気もない。名を求めぬどころか、蘭学書生といえば世間に悪く言われるばかりで、既（すで）に已（すで）に焼けに成っている。ただ昼夜苦しんで六（むつ）かしい原書を読んで面白がっているようなもので、実に訳けのわからぬ身の有様とは申しながら、一歩を進めて当時の書生の心の底を叩いてみれば、おのずから楽しみがある。〉（同上、９２ｐ）

引用１２

〈これを一言すれば――西洋日進の書を読むことは日本国中の人に出来ないことだ。自分たちの仲間に限って斯様（こん）なことが出来る、貧乏をしても難渋をしても、粗衣粗食、一見看る影もない貧書生でありながら、智力思想の活発高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すという気位で、ただ六（むつ）かしければ面白い、苦中有楽（くちゅううらく）、苦即楽という境遇であったと思われる。〉（同上）

１６．異文化受容における好奇心の系譜
→　〈南蛮屏風〉の時代の旺盛な好奇心
→　中世的世界の展開　→　〈仲良く軒をつらねる〉都市の面白さ（狂言）
→　合戦を見物する〈京童（きょうわらべ）〉、築地の破れから都大路を見物する後白河（『玉葉』）
→　狩猟採集における縄文人の好奇心と観察
→　新石器革命を支えた〈具体の科学〉（レヴィ＝ストロース『野生の思考』）

→　民衆的基底部のアニミズム的心性と好奇心の本質連関
→　その基底部からの幕末蘭学の自己展開

１７．江戸的定位の均衡状態
→　心学の基底部、蘭学の前進力　⇔　復古する儒学、国学
→　〈錦旗〉と共に前進する西郷による維新革命の実現
→　自己矛盾的均衡の持続
→　憲政と国体論の並立により紡がれる日本近代
→　自己展開する近代的合理主義は、ともかく立憲を実現することができた

（近代本論第十回キーワード終わり）